ゆうことみゆきの

なるほどアイヌ文化エッセイ

ソンコ de ソンコ

アイヌ文化のことをもっともっと話したい！
本田優子と村木美幸の二人が、
その魅力を交代で執筆する
ソンコ（＝お便り）形式のエッセイです。

Vol.87

今月のテーマ

パシクル ―カラス―

本田優子
（札幌大学教授）

カラスはアイヌ語ではパシクル。でもこれは総称なの。道路端のごみ箱を荒らしているような街なかのカラスはハシブトガラスといい、私が暮らしていた二風谷あたりでのアイヌ語名はシエパシクル（シ＝うんち、エ＝を食べる）。「糞食いカラス」って感じで、あまり良いイメージじゃないよね。でも他の地方では、濃霧で方角がわからなくなった舟人を、鳴き声で陸地に導いてくれる大切なカムイ（神）だったみたい。

一方、人里離れた山や海岸に住んでいるハシボソガラスはカララクと呼ばれ、時にはトノという日本語由来の尊称がつくほど位の高いカムイ（神）とされます。たとえば、こんなお話が―。

『私は美しい妻と暮らしている村おさだったが、子どもに恵まれなかった。ある年、交易から戻ったばかりなのに突然、海辺にある天に届くような高い山に行きたくなり、引っ張られるように山の麓に着いた途端、歩けなくなってしまった。するとカラスがたくさん集まって来て肉や魚を運んでくれ、夜は温めてくれた。そうやって冬を越し春になると、二羽の大きなカラスが来て羽ばたく音がこう聞こえた。「この山に住むコシンプという悪い女神がお前に惚れ、ここへ呼び寄せたのだが、私たちカラスがお前を養い、コシンプを湿地の国へ蹴落とした。家へ送ってやろう」。カラスを追って家の近くまで来たら、再び羽ばたき「私はカララクトノだ。いつも仲間に肉を分けてくれたお礼にお前を助けた。これからも私に少しの供物を捧げてくれたらお前を守護し子どもも授けよう」と聞こえた。それから私にはたくさんの子どもが生まれ幸せに暮らした。』

イラスト／荘田悠人

この他にも、フチ（おばあさん）たちはカラスの鳴き声で客の来訪や病人が出たことを察知したと言うし、狩人たちは冬眠中のクマの穴の場所をカラスに教えてもらったと言います。カラスはアイヌ文化では無くてはならない存在だったみたい。

北海道にはこの他、ワタリガラス（オンネパシクル）が飛来します。とっても賢く、世界各地で特別なポジションを与えられている大型のカラスなのですが、これについては、また今度ゆっくりと。 J

次回のテーマは「アイヌの楽器 ムックルとトンコリー」村木美幸（アイヌ民族文化財団常勤理事）が担当します。

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。

■本田優子（ほんだゆうこ）：金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸（むらきみゆき）：白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■荘田悠人（しょうだゆうと）：平取町二風谷生まれ。漫画家兼イラストレーター。幼い頃のアイヌ文化が原風景。東京在住。